辺島雑感

――情報について――

平野　敬一

ひと夏、カナダ東端の島ニューファンドランドで暮らして、いちばん不自由したのは何かときかれると、食糧や住宅事情でなく（それとて本土より不自由）、島の地理的位置から必然的に生じる情報の乏しさだった、といえそうである。もちろん「地の果て」のニューファンドランドといえども、二十世紀の文明社会の一部。新聞もあれば、テレビもあり、世間に背を向けて孤立しているわけではけっしてない。しかし情報がふんだんに氾濫している日本の社会と比べてみるまでもなく、カナダ本土と比べても、質量ともに情報が希薄で、なにか（いわゆる「情報化社会」？）から締め出されているという印象を、私は最後まで拭い去ることができなかった。

第一、新聞を通しての情報が乏しい。島の首都セント・ジョーンズでは朝刊紙と夕刊紙がそれぞれ一紙ずつ発行されており、この点、同じく朝夕刊を一紙ずつ出している本土のオタワやバンクーバーと比べても、外見上、特に見劣りがするわけではない。しかし、ここの朝刊紙（その題名も失念）は、お粗末で読むにたえず、結局、私は午後から出るイブニング・テレグラム紙を近所のドラッグストアへ買いに行くのを、島滞在中の自分の日課とすることになったのだ。

ところが、この夕刊紙も、どういうわけか、なかなかなじめないのである。公平にいって、同紙はカナダの地方紙として特にレベルが低いわけではないのだが、こちらが地元の情勢に格別の親近感を抱いていないせいか、紙面の大半を占めるローカル・ニュースがどうもピンとこないのである。

トロントにいると、新聞のスポーツ欄で大リーグ所属のトロント・ブルー・ジェイズの戦績（大概負けてはいたが）をたどるのが結構楽しかったことを覚えているが、ニューファンドランドまで来ると、本土の大リーグというのは、もはや影が薄く、ほとんど記事にもならない。その代りというわけでもあるまいが、夏の間、スポーツ欄を連日賑わせていたのは、島のソフトボール大会に関する記事だった。いくら野球好きの私でも、地元チームの勝敗に一喜一憂しながら、このニュースを追う気には、ちょっとなれないのである。それでも、これも勉強のうち、というので、スポーツ以外のローカル・ニュースに、こまめにつき合ったつもりである。ところが、いま思い出そうとしても、記憶に残っている記事がほとんどないという始末。

島に情報がないわけではない。あるにはあるのだが、それが自分にとっての情報にならない、という感じなのである。私のように数週間という短期間でなく、もっと長い歳月をこの地で過ごすようになれば、ローカルなものも、結構、「情報」として受け入れられるようになるのかもしれない。そうなったら、日本の夏の甲子園大会に夢中になるように、この島のソフトボール大会の行くえに、私もかたずを飲むようにならないとも限らない。しかし、短期滞在の旅人の身にとって、それは無理な注文というもの。

とにかくニューファンドランドという所は、旅人にとっては、情報の希薄な、枯渇した社会、という印象を与えることは否めない。正直いって、この情報の枯渇は、かなり私にこたえた。それでも気をつけていると、ときどき本土から空輸され、その分だけ値段が高くなっている、一日か二日遅れのグローブ・アンド・メイル紙（トロント）が店頭に出ていることがある。情報に飢えている私は、飛びつくようにしてそれを買い、家へ持ち帰り、むさぼり読む。そして、たっぷり情報源から栄養を吸収したような気持になる、という次第。情報の豊かな東京にいると、私は無理をしてまでグローブ・アンド・メイル紙を読もうなどという殊勝な気持にならないのだが（カナダ研究者としてなんたる怠慢！）、カナダの辺島にいると、カナダ本土の新聞がさながら千天の慈雨のように感じられるのだから、人間、勝手なものだと思う。

情報供給源としてのテレビも、この島では本土と比べものにならない。地理的にいって、本土の各都市におけるようにアメリカの放送を視聴することは不可能な上、本土との時差に三十分という半端なズレがあって（たとえば本土の正午のニュースなら、ここで午後一時半にずれ込んだりする）、なんとなく気分が乗らないのである。秋風がたつようになっても、私は、この島のテレビに親しむところまでいかなかった。

もちろん新聞やテレビだけが人間の情報源を形成しているわけではない。私には、他に地元の大学関係者とのつき合いもあったが、それでも、日常の生活の糧としての情報の乏しさを、たえず意識させられた。東京にいると、あまりこういうことを意識しないものだが、私たちの日常生活において、新聞、雑感、あるいは電車内の吊り広告などからくる雑多な情報が、どれほど私たちの生活の支え（といったら少々大げさだが）になっているか、いまさらのように私は思い知らされたことだった。

外国に居を移すということは、自分を囲繞し、自分の日々の支えになっている豊かな情報源から、一時的にせよ、自分を断ち切ることを意味する。そんなことは何でもないではないか、と広言する人は、よほど鈍いか、それとも無理なやせ我慢をしているのだろう、とつい私はいいたくなるのである。

（東京大学教授）